

日本人は断り表現において
丁寧さをどう判断しているか
——長さとお当性からの分析——

伊藤恵美子

Japanese Native Speakers' Perceptions of
Politeness when Refusing an Invitation:
An Analysis of the Relationship between
Length and Appropriateness

ITO Emiko

This study attempts to investigate the correlation of length with appropriateness in terms of refusals to an invitation. The data was collected from 116 Japanese native speakers who participated in a survey. The survey consisted of two variables: 1) length (long/short) and 2) appropriateness (appropriate/inappropriate). The analysis of the survey results verified the general hypothesis that, "Longer expressions are politer than shorter expressions with regard to refusals under the condition that the expression is appropriate." The results of the present study show an important implication for learners of the Japanese language. The Japanese language is considered HC communication (High Context). This means that the context of communication is important in socio-cultural discourses regarding Japanese language use. If these socio-cultural expressions of communication are not followed, communication is considered incomplete (Hall 1976). This suggests that learners also need to be able to estimate the appropriate level of politeness in a close relationship and to use acceptable expressions when speaking with Japanese native speakers.

キーワード: 中間言語語用論、ポライトネス、断り行為、長さ、お当性

はじめに

世界のボーダーレス化に伴って、コミュニケーション能力の養成が期待されるとともに学習者の第二言語(second language)¹⁾を語用的能力(pragmatic competence)から解明しようとする試みが盛んになってきた。この分野は、中間言語語用論(interlanguage pragmatics)と呼ばれている(Blum-Kulka, House, & Kasper 1989)。中間言語語用論は、その研究課題の第一に「発語内効力とポライトネスの関係を理解すること(The perception and comprehension of illocutionary force and politeness)」が挙げられているように(Kasper & Rose 1999: 81)、付与の状況で学習者が発話する第二言語の丁寧さ、すなわちポライトネス(politeness)²⁾を問う(ポライトネスの詳細は下記を参照されたい)。

言語を経済性の側面から考えると、同じ命題を言い表すなら、長い表現より短い表現のほうが効率的である。ところが、人間関係に影響を及ぼすと予想されるような言いにくいことを口にしようとする、ためらったり言いよどんだりする。このためらいや言いよどみは、相手との人間関係を判断した後、その関係性をその後も維持していくのに必要な配慮に即した言語表現を選択する過程で生じるので、相手に対する話者の心理状態が言語に表出された結果と言えよう。なぜなら、言語の経済性を重視すれば短い表現が選択されるところを敢えて長い表現を選択し、コストをかけていることを示すことで、発話者は相手を厚く遇していることを伝ようとしているからである。つまり、前置きを付けたり同じ内容のことばを重ねたりして発話者が伝えようとしているのは、メッセージの核心的な内容というより、相手への配慮、言い換えればポライトネスと言えるのではないか。

ところが、数編の論文が表現の長ささと丁寧さの関係に関して理論的に考察して一定の見解に達してはいるものの(Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz 1990; 生田 1992; 1993; 藤森 1994 など)、言語教育・コミュニケーション関係の分野で実証的な調査および研究は、筆者の知る限り行われていない。そこで、本稿は上述の観点から言語表現の長さはポライトネス、つまり丁寧さの一指標であることをデータに基づいて考察し、併せて日本語教育への応用も探っていきたい。

1. 先行研究と本稿の位置づけ

1.1 先行研究

まず、本稿において重要な概念を成すポライトネスに関して述べる。Brown & Levinson (1987) が提唱したポライトネス理論はフェイス (face) を中心に論が展開され、人間には、他人に理解・賞賛されたいポジティブ・フェイス (positive face)³⁾ と、他人に邪魔されたくないネガティブ・フェイス (negative face) があり、双方のフェイスを保ちたい欲求があると言う。このフェイスを脅かす行為を FTA (Face Threatening Act) と呼ぶ。FTA は、話し手と聞き手の力関係 (power)、話し手と聞き手の社会的距離 (distance)、相手にかかる負担の度合 (ranking) の和で表される。ポライトネスは、その概念が提唱されたころは体系としての敬語との整合性が論じられたが (Ide 1989; Matsumoto 1989 など)、最近ではポライトネスは敬語より広い社会的な概念として認識されるに至っている。つまり、ポライトネスは対人関係における調節機能であって、体系としての敬語の有無に関わらず人間の行動における普遍性を具えていると看做されている (生田 1997)。

本稿の先行研究は、中間言語語用論で言語表現の長さ丁寧さの関係について述べている諸研究である。先行研究の第一に挙げられるのは、勧誘に対する断り表現でアメリカ人の英語母語話者は親しい相手ほど表現が長くなる傾向を見出している Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) である。第二は、日本人も韓国人日本語学習者も中国人日本語学習者も目上の勧誘に対して断る場合に表現の長いものが多いことから、日本語においても長さ丁寧さに関係があることを見出した藤森 (1994) である。第三は、日本語・米語を問わず、一般的な傾向として表現の言語形式に現れるポライトネスは言語表現の長さに表示されると主張する生田 (1992) である。第四は、依頼者により予測される被依頼者に対する負担が大きくなれば対話ディスコース・ユニットが長くなるので、表現の長さはポライトネスの度合を高める機能を有していると説明する生田 (1993) である。さらに、これらの知見を踏まえて、日本語の断り表現ではポライトネスは言語表現の

長さに表されると論じている伊藤(2002)も挙げられよう。

1.2 研究目的と仮説

上述のように、言語表現の長さや丁寧さの関係に関していくつかの論考が試みているが、実証的な調査は行われておらず、推測の域を出ていない。そこで、本稿は、前節の先行研究を踏まえて、言語表現の長さや丁寧さの関係を断り行為において明らかにすることを目的とする⁴⁾。仮説は「断り行為は、その発話が適切性を備えているという条件下で、短い表現より長い表現のほうが丁寧である」である。

ここで、本稿で議論する「丁寧」は、敬語の範疇ではなく、ポライトネスとして捉えられる概念であると定義する。また、本稿は中間言語語用論に立脚するところから、「言語表現が長い」とは「意味公式 (semantic formulas) の数値が大きい」と同義であると看做す。意味公式とは、中間言語語用論で発話を分析する際に使われている単位であり (Blum-Kulka, & Olshtain 1984; Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz 1990; 生駒・志村 1993)、断り行為においては「人がものを断るときに使う言葉を、その意味内容によって分類したもの」となる(生駒・志村 1993: 44)。意味公式を{ }で表示すると、断り行為は{感謝}{理由}{結論}{詫び}{代案}などから構成されている(藤森 1994; 伊藤 2002; 2004)。

2. 調査

2.1 予備調査

予備調査は、本調査を行うに先立って2002年2月に、3名の日本人に調査紙を用いて自由回答法で実施した。調査紙調査の後、フォローアップインタビューも行った。

予備調査の結果から、FTAを構成する要素のうち、話し手と聞き手の力関係は大きいほうが、話し手と聞き手の社会的距離は小さいほうが、ことばの使い方に大きい影響を与えることがわかった。そこで、本調査の調査デザインは、対話の相手は「目上」で「親しい」関係にある「先生」に

日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか

設定することにした。「先生」は具体性があるが、「親しい」は辞書的に説明しても調査対象者が想起する概念は一樣ではないと予想されるので、調査対象者が比較的同程度に「親しい」関係にある先生をイメージできるように、先生を「担任」と規定した。

2.2 長さと適切性を指標とする本調査

2.2.1 調査対象者

調査は日本国内で行い、調査対象者は20歳代後半から50歳代の日本人である。回答は116名から得られた。回答の内訳は表1のとおりである。

表1 有効回答の内訳

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	合計(名)
男性	7	13	16	8	44
女性	26	18	15	13	72
合計	33	31	31	21	116

男女比は約2対3で、世代別では20歳代・30歳代・40歳代はほぼ同数で50歳代がやや少ないが、20歳代から50歳代は社会を構成する代表的な世代であり、日本の社会文化的規範を反映していると言えよう。調査者の所属先の大学生から基準データを収集する先行研究(生駒・志村1993など)が多いなか、本稿が社会人からデータを採った根拠を以下に述べる。Thomas(1983)によれば、語用的誤り(pragmatic failure)は語用言語的誤り(pragmalinguistic failure)と社会語用的誤り(sociopragmatic failure)に分けられ、本稿が議論しているのは後者についてである。語用的能力は、社会化(socialization)の程度に比例して高くなるので、大学生の語用的能力は発達段階にあると一般的に看做されている。玉岡(1997)では、成熟度は年齢差に反映され社会的経験の違いは就労経験に反映されるので、心理学の発達理論では年齢と就労経験は文化理解に影響を与える要因とされている。Yamashita(1996)は母語話者の語用的能力において社会経験は重要

な要因であると指摘し、熊井(1992)は大学生の行動は相手に失礼な印象を与えることがあり待遇面で必ずしも望ましいものとは限らないと考察している。

中間言語語用論は、先行研究が理論的には個人的な要因を認めながらも、調査の実施段階では「母語話者」という唯一の側面に基づいて調査対象者を設定しているところからわかるように(Blum-Kulka & Olshtain 1984: 198-199)、調査対象者の下位的な属性に強い関心を示す分野ではない。また、調査対象者の性差に関しては、すでに多くの研究が論証しており(Cowan, Drinkard & MacGavin 1984; Instone, Major & Bunker 1983 など)、一般的に、男性は女性より直接的な表現を用いるし、対話の相手が女性よりも男性のほうがより直接的な言い方がなされるので(Takai, Cargile & Wiemann 2000)、性差が重要な要因であることは否定しないが、本稿では議論の対象としない。

2.2.2 実施期間

調査の実施期間は、2002年3月下旬である。

2.2.3 実施方法

調査は調査紙を用いて実施した。調査紙の配布と回収は、郵便と電子メールで行った。

2.2.4 調査項目と分析の手続き

調査紙は、以下に示したように6項目の質問とフェイスシートから成る。質問に対する回答の取り方は選択回答法であり、回答は選択肢から1つ選ぶよう調査紙に指示を明記した。選択肢には数字を付して、これを尺度とした。数字は1から6であり、1が会話の場面にふさわしくないから「失礼」、6が会話の場面にふさわしく「丁寧」とした。選択回答法の場合、選択肢は5ないしは7とする調査が多い。しかし、回答者の約20%は選択肢を選ぶのを避けて安易に真ん中の選択肢にチェックする傾向があることを鑑みて(Dörnyei 2003: 37)、調査対象者から「丁寧」か「失礼」かの判断

日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか

を引き出すために、本稿では選択肢を偶数にした。統計処理を行うに際してはデータの正規分布が前提であることから、選択肢は奇数のほうがよいと考える向きもあろうが、分布の非正規性はデータの外れ値による影響が強い。したがって、回答法が選択式であれば外れ値はあり得ず、分布の歪みは大きくないと推測される。また、本稿は6段階尺度を用いてデータを収集したが、これは順序尺度を数量化して近似的に間隔尺度と看做しているわけであり、選択肢間を厳密に測定することは不可能なので、分布の正規性だけをあまり厳格に論じることには意味がない。

【調査項目】

あなたは先生です。担任として受け持っている学生(日本人)をパーティに招待したら、学生が(1)から(6)の返事をしました。学生の断り方から受ける印象を選択肢から一つ選んでください。

- (1) ありがとうございます。でもその日は友達の結婚式で、行くことができません。すみません。来週の日曜日にホームパーティをしますので、よろしければ来ていただけませんか。

1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

- (2) ありがとうございます。でもその日は友達の結婚式で、行くことができません。すみません。代わりに、来週の日曜日に私の家に招待してあげます。

1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

- (3) せっかくですが、その日は行けないんです。

1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 _____ 6 _____
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

(4) せっかくですが、その日は行くことができません。

1_____2_____3_____4_____5_____6
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

(5) すいませ〜ん。その日はツレの結婚式に行くんで、ムリッす。

1_____2_____3_____4_____5_____6
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

(6) ごめんな。行かれへん。その日は無理なんさ。

1_____2_____3_____4_____5_____6
失礼 丁寧
(会話の場にふさわしくない) (会話の場にふさわしい)

「丁寧」と「ふさわしい」に関しては、親しい相手に対する丁寧な言い方がそぐわないと知覚するように、丁寧な言い方には相手を遠ざける機能があるので、「丁寧」が「会話の場にふさわしい」と必ずしも一致するとは限らないが、本稿は語用論に立脚しており、付与の状況における言語表現の適切性を考察するものである。本稿の調査では、対話の相手は先生なので、「丁寧」は丁寧すぎるを意味するのではなく「会話の場にふさわしい」丁寧度であると明示した。同様に考えて、「失礼」は「会話の場にふさわしい」丁寧度ではないから「失礼」という意味であり、選択肢の4はどちらかといえば「丁寧」であり、選択肢の3はどちらかといえば「失礼」を意味する。

調査デザインは、2要因×2水準である。第1要因は長さで、長いと短い2水準、第2要因は適切性で、適切と不適切の2水準である。調査者が望む結果を調査対象者に誘導することを避けるために、(1)長くて適切な表現、(2)長くて不適切な表現、(3)短くて不適切な表現、(4)短くて適切な表現、の4パターンを質問として設定した。

日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか

(1)と(2)の返事は、{感謝}して、{理由}を述べて、{結論}を言って、{詫び}てから、{代案}を提示する一連の流れで、いずれも5つの意味公式から構成されている。言語形式のレベルは、(1)も(2)もともに授受動詞を補助動詞として使っている。したがって、(1)と(2)の返事は、言語形式のレベルも表現の長さも同じである。他方、(1)と(2)には相違点が二箇所ある。第一は、(1)の最後の文が疑問形で目上の相手に行動の選択を委ねているのに対して、(2)の最後の文は肯定形で断言していることであり、第二は、(2)が目上の相手に対して「代わりに」と「～てあげる」を使用していることである。聞き手に行動選択の自由がある表現と、話者が断定する表現を比較すれば、前者のほうが目上の相手に対してふさわしい返答である。さらに、「代わりに」は相手に押し付けがましさを与えるので、目上の相手に対して使うのはふさわしくなく、「～てあげる」は相手に恩恵を与える表明なので、目下から目上に対して使うと無礼な印象を与える。

(1)と(2)の返事が{感謝}、{理由}、{断り}、{詫び}、{代案}のセットで意味公式が5つであるのに対して、(3)と(4)の返事は{感謝}と{結論}のセットで意味公式が2つなので、前者の表現に比べると後者の表現はどちらも短い。(3)と(4)の違いは、(3)が「～んです」で目上の相手に対して自己を主張して適切性に欠けるのに対して、(4)は感情的な言い方をしていない点である。マクグロイン(1984)によれば、「～んです」は話し手が主観的に情報を強調する必要性を認めた場合に使われ、評価的でもある。

表2に示したように、質問の(5)と(6)はダミーなので、有効回答としない。本稿は、日本人の丁寧さの認識を意味公式の数値から考察していくために、調査紙調査で収集したデータに統計を施しているが、データを統計的に分析するには十分な量のデータを収集する必要がある。十分な量のデータを収集するためには調査紙の回収率を上げることが不可欠であるが、回収率を最大にするには調査対象者にかかる負担を最小にすることが望ましい。この点を考慮して、本稿では質問を最少項目に抑えたため、調査対象者に調査の目的を気づかれる恐れがあり、それを回避するためにダ

ミーを質問に加えた。

表2 調査紙の内容

質問	長さ	適切性	回答の有効性
(1)	長い	適切	有効回答
(2)	長い	不適切	有効回答
(3)	短い	不適切	有効回答
(4)	短い	適切	有効回答
(5)	—	—	無効回答
(6)	—	—	無効回答

2.2.5 分析方法

データの分析は、(1) から (4) までの有効回答を統計的に処理した⁵⁾。

3. 統計分析の結果と、そこから得られた適切性に関する考察

表3は、平均値と標準偏差、および二要因の分散分析(Analysis of Variance)を行った結果である。結果は図1に示したように、長さ×適切性(A×B)において交互作用効果(interaction effect)⁶⁾が有意であった($F(1, 115) = 217.44, p < 0.001$)。そこで、主効果の検討はとりやめて、長さ×適切性において多重比較のために対応型のt検定(t-test)⁷⁾を実施した。

表4が、対応型のt検定の結果である。長さ×適切性、両条件において0.1%水準で統計的な差異が認められた。つまり、表現が同じように長くても、適切な表現と不適切な表現は統計的に有意であった($t(115) = 19.29, p < 0.001$)。同様に、表現が同じように短くても、適切な表現と不適切な表現は統計的に有意であった($t(115) = -5.07, p < 0.001$)。また、適切性が同じように適切であっても、長い表現と短い表現は統計的に有意であった($t(115) = 5.64, p < 0.001$)。同様に、適切性が同じように不適切であっても、長い表現と短い表現は統計的に有意であった($t(115) = -10.06, p < 0.001$)。換言すれば、多重比較のため全体の危険率を5%に押さえるので、 α レベル(有意水準)をボンフェローニの方法で調整したとしても、これら

日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか

4つのペアは少なくとも $p < 0.05$ レベルですべて有意差があったことになる。

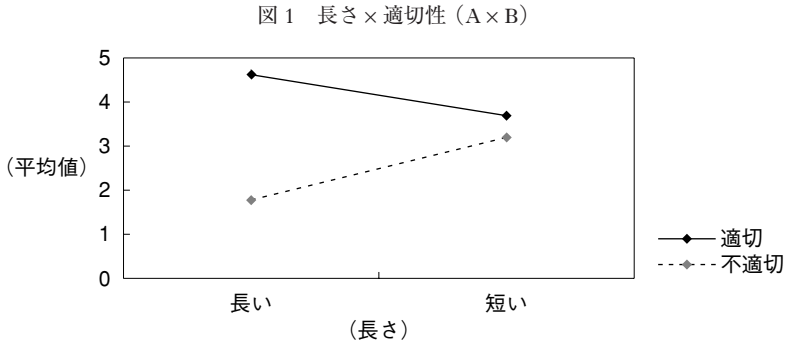


表3 二要因の分散分析

長さ (A)		長い(標準偏差)	短い(標準偏差)
適切性 (B)	適切	4.62 (1.40)	3.69 (1.13)
	不適切	1.76 (1.01)	3.21 (1.11)
A	(1, 115)	0.053†	
B	(1, 115)	0.000***	
A×B	(1, 115)	0.000***	

***: 0.1%水準で有意、 **: 1%水準で有意、 *: 5%水準で有意、 †: 10%水準で有意傾向

表4 対応型の t 検定

質問の組み合わせ	一定条件	自由度	t 値	有意確率(両測)
(1) 長くて適切 — (2) 長くて不適切	長さ	115	19.29	0.000***
(3) 短くて不適切 — (4) 短くて適切	長さ	115	-5.07	0.000***
(1) 長くて適切 — (4) 短くて適切	適切性	115	5.64	0.000***
(2) 長くて不適切 — (3) 短くて不適切	適切性	115	-10.06	0.000***

***: 0.1%水準で有意、 **: 1%水準で有意、 *: 5%水準で有意、 †: 10%水準で有意傾向

次に、表3の平均値を検討する。質問(1)の回答の平均値は、4.62である。質問(2)の回答の平均値は、1.76である。質問(3)の回答の平均値は、3.21である。質問(4)の回答の平均値は、3.69である。これを平均値の大きいものから順に並べると、(1)>(4)>(3)>(2)となる。ところで、選択肢には1から6の数字が付してあり、1が「失礼」で6が「丁寧」であった。つまり、小さい数字より大きい数字のほうが、より「丁寧」であり、会話の場にふさわしいことを意味する。質問の回答を丁寧さの順、つまり(1)>(4)>(3)>(2)の順で現すと、(1)長くて適切な表現>(4)短くて適切な表現>(3)短くて不適切な表現>(2)長くて不適切な表現となる。表3に示したように、4つのペアは長ささと適切性の条件において、1つの異なる条件のもとに設定した。t検定の結果から、条件を異にした4つのペアは、それぞれ0.1%水準で統計的な差違が認められた。したがって、適切性が備わっていれば、短い表現より長い表現のほうが丁寧であると考えられ、仮説「断り行為は、その発話が適切性を備えているという条件下で、短い表現より長い表現のほうが丁寧である」は検証された。

4. まとめに代えて——本稿の限界、今後の課題、日本語教育への示唆

本稿では、言語表現の長ささと丁寧さの関係断り行為において明らかにするために、仮説「断り行為は、その発話が適切性を備えているという条件下で、短い表現より長い表現のほうが丁寧である」を立てて、調査・分析を行った。収集したデータを統計的に分析した結果から、本稿の調査においてとの限定つきではあるが、仮説は検証された。したがって、言語表現の長さは丁寧さの一指標と捉えてもよいのでないだろうか。

しかしながら、本稿の調査には問題点が認められる。それは、調査紙の回収率を上げるために調査対象者にかかる負担を軽くしたいと考えて、質問項目を最小限に抑えたことである。調査の実施期間が年度末で教育機関も一般企業も多忙な時期であることも考慮した結果ではあるが、同じような状況設定で複数の場面を設定したら、もっと詳細に分析ができた可能性は否めない。

日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか

今後の課題は、分析対象を文字言語に止どめず音声言語にまで広げて、言語表現における長さや丁寧さの関係を考察することである。調査対象者から、「(3)と(4)は、音調によって受ける感じが変わるように思います」とのコメントが寄せられたが、これは調査紙調査を採った本稿の方法論の限界である。また、本稿の調査は調査紙調査のため、相づちや中途終了文は分析の対象から除外したが、それにより自然な日本語から遠ざかってしまった観もあり、今後はこの点を補えるような調査方法で分析を進めていきたい。

最後に、日本語教育との関わりについて考える。質問の回答を丁寧さの順で並べると、長くて適切な表現 > 短くて適切な表現 > 短くて不適切な表現 > 長くて不適切な表現となった。これは、適切性が具備されていれば、短い表現よりも長い表現のほうが丁寧であるが、適切性が具備されていない場合は、長い表現よりも短い表現のほうが丁寧であることを示している。つまり、学習者が対話の状況を正確に把握していれば、詳細な説明は相手から好感が持たれるだろうが、状況を正確に把握していなければ、詳細な説明は逆効果でしかない。日本語母語話者であれば、相手との関係性や対話が行われる場面や事柄の重大性などから、日本語を運用する際に自己の表現の適切性が瞬時に判断できるだろう。しかるに、日本語と学習者の母語とで所与の場面における表現の適切性が異なるうえに、日本語が文脈の依存度が高い言語であることを斟酌すると (Hall 1976)、学習者にとって日本語における適切性の判断は容易ではない。以上の議論から、学習者が日本語を運用する際に状況に応じた日本語を判断できる能力、言い換えれば社会語用的誤り (sociopragmatic failure)⁸⁾ を犯さないような能力を、日本語教育の現場は養成していくことが求められる。今のところ語用的能力の具体的な特徴のいくつかは見出されているが、体系が解明されるには至っていないので、語用的能力を向上させる適切な指導法も確立されていない (Kasper & Rose 2001)。しかし、第二言語環境で学ぶ学習者は、文法的エラー (grammatical errors) よりも語用的エラー (pragmatic errors) のほうが深刻だ、と認識している報告が出されていることからわかるように (Bardovi-Harlig & Dörnyei 1998)、語用的なエラーはなおざりにして

おけない非常に重要な問題であることを指摘したい。

日本語母語話者が状況に合致した言語表現を選択するとき、何を基準にその表現がふさわしいと判断しているのかを解明するために、本稿は検証可能な方法で分析を試みた。本稿は日本語母語話者が断り表現において丁寧さを判断する一定の基準を示せたと考えるが、今後、語用的能力のシステムの更なる解明が望まれる。

付 記

本稿は、名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻に提出した博士論文の一部に加筆修正を行ったものである。データ収集にご協力くださった方々、ならびにご指導くださった名古屋大学大学院国際開発研究科の木下徹教授、および名古屋大学教育学部の高井次郎助教授に、心より感謝を申し上げたい。

注

- 1) 第二言語と外国語は、言語がどこで使われているかという地理的な条件で分けられる。例えば、日本語は日本で学んでいる留学生にとっては第二言語であり、自国で学んでいる学生にとっては外国語である。
- 2) 最近では Brown & Levinson (1987) に基づく概念は片仮名で表記されているので、本稿もそれに倣う。
- 3) positive は「積極的」、negative は「消極的」と和訳されることもあるが(『外国語教育学大辞典』1999 など)、日本語に置き換えることで Brown & Levinson (1987) で定義された意味が不明瞭になる恐れがあるので、本稿では片仮名表記とする。同じ理由から、face も本稿では片仮名表記とする。
- 4) 皮肉など相手の意図を理解するのにコストのかかる表現や慇懃無礼な言い方は、本稿では議論の対象としない。
- 5) 「SPSS11.0」を用いて、二要因(長さ×適切性)の分散分析をした後で、多重比較のため、対応型の t 検定を行った。
- 6) ある従属変数に対する 2 個の独立変数の効果を同時に分析する場合、一方の変数の条件によって他方の変数の効果が異なる時、従属変数に対して 2 個の変数間に交互作用効果があると言う。交互作用効果が有意にある場合、それらの主効果の有意性に意味はない。
- 7) 同じ人間が 2 つの異なる条件下で反応している場合に、条件間の違いを求めるときに有効な方法である。
- 8) Thomas (1983) は、語用的誤り (pragmatic failure) を語用言語的誤り (pragmalinguistic failure) と社会語用的誤り (sociopragmatic failure) の 2 種類に分けており、本稿で議論している問題は、後者に該当する。

参考文献

【日本語文献】

- 生田少子 (1992) 「対話ディスコースにおける politeness strategy (その1)」『明治学院論叢』495号、59-74頁。
- (1993) 「対話ディスコースにおける politeness strategy (その2)」『明治学院論叢』529号、59-71頁。
- (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』26巻6号、66-71頁。
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー——『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号、41-52頁。
- 伊藤恵美子 (2002) 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について——勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系プミプトラのポライトネス」『日本語教育』115号、61-70頁。
- (2004) 「マレー語母語話者のポライトネスの諸相——勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士論文(未公刊)。
- 熊井浩子 (1992) 「外国人の待遇行動の分析(1)——依頼行動を中心にして」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』28-1号、1-44頁。
- 玉岡賀津雄 (1997) 「グループ間およびグループ内分析のためのサンプル諸特性記述」江淵一公(編著)『日本語の習得と文化理解 (財)国際文化フォーラム委託研究報告書』13-24頁。
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー——『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1号、1-19頁。
- マクグロイン・H・直美 (1984) 「談話文章における『のです』の機能」『言語』13巻1号、254-260頁。

【外国語文献】

- Bardovi-Harlig, K. & Dörnyei, Z. (1998). Do language learners recognize pragmatic violations?: Pragmatic versus grammatical awareness in instructed L2 learning. *TESOL Quarterly*, 32, 233-262.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. (Pp. 55-73). Rowley, MA: Newbury House.
- Blum-Kulka, S., House, J. & Kasper, G. (1989). Investigating cross-cultural pragmatics: An introductory overview. In Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (Eds.), *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. (Pp. 1-34). Norwood, NJ: Ablex.

- Blum-Kulka, S., & Olshtain, E. (1984). Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196–213.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cowan, G., Drinkard, J., & MacGavin, L. (1984). The effects of target, age, and gender on use of power strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1391–1398.
- Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in Second Language Research: Construction, Administration, and Processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistics politeness. *Multilingua*, 8, 223–248.
- Instone, D. Major, B., & Bunker, B. B. (1983). Gender, self confidence, and social influence strategies: An organizational simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 322–323.
- Kasper, G., & Rose, K. R. (1999). Pragmatics and SLA. *Annual Review of Applied Linguistics*, 19, 81–104.
- (2001). Pragmatics in language teaching. In K. R. Rose, & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in Language Teaching*. (Pp. 1–9). New York: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Y. (1989). Politeness and conversational universals-observations from Japanese. *Multilingua*, 8, 207–221.
- Takai, J., Cargile, A., & Wiemann, J. (2000). Situational and relational contexts of direct communication strategies: A cross-cultural comparison. *Convention of the National Communication Association, Seattle*, 1–32.
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 91–112.
- Yamashita, S. O. (1996). *Six Measures of JSL Pragmatics*. Honolulu: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.